

頭の良くなる薬

小六・山本 ゆりか

ケイタロウは苦しんでいた。明日の数学のテストの勉強をしていたのだ。ケイタロウは学校の教科の中でも一番算数が苦手だ。勉強をしようとしても全く頭に入らない。だから、いつもゲームやまんがを手にとってしまった。そしてお決まりの三十点台。さすがのママもため息をついてしまうほど、それを今までにとっている。今回はかなりもちこたえて十五分やっているが、もう限界でえんぴつがぜんぜん動かない。そして願った。

「頭の良くなる薬があればいいのに！」

これは日本中いや世界中の子どもたちがねがう薬だろう。ケイタロウは今までもたくさん願った。しかし、今回はとても苦しくて心の底から、むねが張りさけそうになるぐらいに願った。その時、とつぜんベルがなった。ママに、「ベルがなったらママにすぐ伝えなさいね」と耳にたこができるぐらい言われていたが、ラッキーなことに今はママがいない。ケイタロウは、げんかんに行ってかぎを開けた。すると、そこにはメタボの体型の中年のおじさんが立っていた。黒いスーツを着ていて、とても小さいかわカバンを持っていてとても目力が強かったので、ケイタロウはいっしゅんたじろいってしまった。その人は、げんかんに入ったしゅんかんにしゃべった。

「ご注文のお品物をお届けに参りました」

その一言でケイタロウは目を白黒させた。

「え……！ 何もたのんでないんだけ、ん……？」

ケイタロウはおじさんがとり出した、白い容器に目が引かれていった。なぜなら、そこには「頭の良くなる薬」と書いてあったからだ。その容器を見たしゅんかんに質問が頭の中からあふれそうになった。そして、それを片っぱしから言おうかと思っただけ顔を上げたら、もうそこにはだれもいなかった。ケイタロウは少し不思議に思ったが、すぐに自分の部屋に入って、いっしょに入っていた説明書を速読した。そこにはこう書いてあった。

「勉強ってやってもやっても全然頭に入ってきませんよね？ そんなあなたに『頭が良くなる薬』！ テストの前日に水と薬一じょうを飲むと、次の日のテストは、なんと今までの点数より六十点もプラスされちゃいます。この薬を今すぐ飲んでママを喜ばせちゃおう！」

上の二、三行だけ読んで、台所に飛びこんだ。そして、水と薬一じょうを用意して飲みこんだ。そして、勉強をしないで、ベッドにもぐりこんだ。次の日、テストを受けてみると、手が自動的に動き出して、五十五分のテストを二十分で終わらせてしまった。おかげで、残りの三十五分は夢の世界へ行くことができた。その次の日、テストが返ってきた。そして、まさかの九十点をとることができた。ケイタロウは人生はじめての九十点に、うれしすぎてなみだが出た。家に帰って、ママに見せたら号泣して、

「ついに本気を出してくれたわね！」

とたくさんほめてもらい、しかもおこづかいを千円もくれた。そこで、ケイタロウはある作戦を思いついた。そう、百点をとって、もっともっとママを喜ばせて、ほめてもらって、おこづかいをもらうために。

そこで、ケイタロウは二つの案を考えた。一つ目は薬をたくさん飲む。二つ目はたくさん勉強をする。一つ目は、体に害があったらいけないと思ったから、二つ目の案を実行した。その日からケイタロウはママが心配で見に来たぐらい、別人のように勉強をした。百点を夢見ながら。そして、まさにまったテストの日。

——きのうはちゃんと薬飲んでねたし、百点なんか楽勝楽勝！

しかし、そううまくいかなかった。あんなにたくさん勉強したのにどの問題も全くわからないのだ。なやみ苦しんでいたらあつという間にテストが終わってしまった。そして、返ってきたテストは0点。家に帰って、ママに見せたら、

「あんなに勉強してたのにどうしたの！？」

と問いかけられたが、全く答えられなかった。ケイタロウは自分の部屋にこもってくやしなみだをながした。

——なんで、なんで、なんで！？ 勉強したら百点とれると思ってたのに！

そして、ふと目についた薬の説明書の下の方に小さく書いてある注意事項こうを読んで見た。そこにはこう書いてあった。

「——注意事項こう——この薬を使う時は、必ず頭の中をからっぽにしてください。そうでないと、薬が体に入ってしまった時に、頭の中にある漢字や、問題の解き方などが入ってきた薬にびっくりしてパニックになって全て消えてしまうのでご注意ください」

そしてケイタロウは、

——ああ、なんでちゃんと読まなかったんだろう！ もうこんなことにならないように、この薬はすてよう。

そして、ケイタロウはこの日から真面目に勉強をするようになったとき。おしまい。